

私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。

イザヤ51:1

2014(26)年 週 報

6月22日
第4聖日
3357号

「テサロニケ教会のための祈り」
(I テサロニケ連続講演第12回)

聖言

私たちは、あなたがたの顔を見たい、信仰の不足を補いたいと、昼も夜も熱心に祈っています。テサロニケ I 3 : 1 0

礼拝の恵み⑫ 聖書が示す礼拝の対象
一、御子なる神

「さらに、長子をお送りになるとき、こう言われました。『神の御使いは、彼を拝め。』(ヘブル一ノ六)
(二) 我らは子を礼拝すべきである。

A 我らは御子をその本質のゆえに礼拝すべきである。

1 彼は神の子である。神の子として彼は父に等しい

2 彼は万物の造り主である

3 御子のみが父をあらわす

B そのなしとげられた、みわざのゆえに御子を礼拝

1 その受肉のゆえに

2 完全な服従の聖なる生活のゆえに

3 我らのための御子の自発的犠牲のために

4 その輝かしい復活と昇天のゆえに

C 今なしつつあるみわざのゆえに御子を礼拝すべき

1 その人々の助主とし、仲立ち、大祭司とし

2 その体である教会のかしらとして

D 御子やがて、なさろうとしているみわざのゆえに

(「礼拝」APギブス著)

イエス・キリスト聖成伝道教会・東洋聖書神学院・聖成基督教団

牧師 山本 稔 〒653-0812 兵庫県神戸市長田区長田町1丁目2番6号

電話：FAX (078) 691-1419 郵便口座番号 01170-3-20374

<http://jchec.org/>

minoru_yamamoto@hotmail.co.jp メール m7-inoru@ezweb.ne.jp

二〇一四年六月一五日午前一〇時 礼拝 山本牧師

「テサロニケ教会の信仰と愛」(一)テサロニケ連続講演第一(一回)

「ところが、今テモテがあなたがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛とについて良い知らせをもたらしてくれました。また、あなたがたが、いつも私たちのことを親切に考えていて、私たちがあなたの方に会いたいと思うように、あなたがたも、しきりに私たちに会いたがっていることを、知らせてくれました。」(テサロニケ一三ノ六)

「私たちが神を愛したのでなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」(一ヨハネ四ノ一〇)。パウロはテサロニケ教会を愛していました。なぜなら、彼が三回の安息日で建てた教会です。しかし、迫害のためにアテネ、コリントへ行かねばならなかった。愛弟子テモテを遣わしてテサロニケ教会の状況を把握させた。その結果、嬉しい知らせを持って帰ってきたのである。彼らもパウロに会いたがっている。信仰も神に対する愛も燃えており、再臨にたいする信仰もしっかりしていたのである。それにしてもパウロのテサロニケ教会に対する思いは恋愛関係のような熱い思いがある。一〇節の昼も夜も熱心に祈るといふのはまさに愛する人を一日中思い続けることである。どうしてそのようになるか。それはキリストが花婿であり、テサロニケ教会は花嫁であるとの信仰である。パウロはそれを悪魔が妬んで花嫁が他の者に誘惑されることを恐れていたのである。男性はいくらでもいるから一人に縛られる必要はないとか。恋愛だけが人生でない。いろんなことを楽しみたい。しかし、信仰なくして神に喜ばれることはあたわず。(ヘブル一)

まず、キリストを中心とした生活。内にキリストがともに住んで

折られる生活を確立すること。そこから仕事もスポーツも勉強も趣味も娯楽も教会生活も楽しく、有意義な人生を送れるのです。パウロは孤高の人。唯我独尊の人でなく、いつも信者のことを思っている人でした。信者のためなら自分の生命をささげても惜しくはなかったのです。このような指導者を持つ教会は幸せです。本当の羊飼いと偽の羊飼いの違いは狼が襲ってきた時に偽は羊をすてて逃げるが本物は命がけで狼と戦い羊を守ります。お金を持つている信者は守るが、お金のない信者は守らない。これは本当の牧師ではない。パウロはテサロニケの信者が心配でならなかった。だらしのない生活をしている。なぜなら、神様は愛だから何をしてでも許されるという考えで罪を犯して平気な信者がいるし、再臨が近いと言うことで仕事もしないで遊んでいる信者がいるという噂があった。それでテモテの様子を見に行かせた。その結果良い知らせをもたらしてくれたのです。パウロとテサロニケ教会は片思いでなく相思相愛であったのです。これはどちらもキリストと一つとなつていっているのです。花婿キリストの花嫁です。パウロはそれを知らされほつとしました。彼は方の荷がおりたように、新たな信仰の世界に羽ばたくことができました。

それとともに、甘い誘惑がある。しかし、これが一番怖い。母の所に毎晩六時に電話がかかる。いまどき、知らないところから電話があると注意するように言われている。しかし、毎日かかってくる親しみを覚える。これが相手の思う壺である。そうしたところから、振込み詐欺に会うのである。また古い誘惑もある。アスカという歌手が覚せい剤のために逮捕された。古いと覚醒剤は密接な関係がある。パウロは信者が信仰の振込み詐欺に会うのを心配した。それでシラスを残して、テモテを遣わしたのである。

二〇一四年六月一八日午後七時 祈祷会 山本牧師

「包圍と窮乏生活に関するしるし」(エゼキエル連講一一回)

「あなたは小麦、大麦、そら豆、レンズ豆、あわ、裸麦を取り、それらを一つの器に入れ、それをパンを作り、あなたがわきを下にして横たわっている日数、すなわち、390日間それを食べよ。」(エゼキエル四ノ九)

ところで不快でかつ奇妙な印象を与えるのは、糞でパンを焼くと言う命令である。と言っても古代中近東では動物の糞を乾燥させて燃料に用いていたし、現在でもベドウィンは牛やらくだの糞を乾燥させて使用する。だからこれは私たちが思うほど奇妙なことではなかったのだろう。しかし食物の浄不浄の律法を尊重するイスラエル人は決してそんなことはしなかった。そのイスラエル人が糞でパンを焼くと言うのはよほどのことである。包圍期間中の燃料不足の深刻さをほめかしている。しかしそれだけでない。一三節はこれについて「このように、イスラエルの民はわたしが追いやる国々の中で彼らの汚れたパンを食べなければならぬ。」と説明している。つまりそれは、包圍の後、彼らが異邦の国々に追いやられ、そこで不浄なパンを食べるようになることの象徴である。彼らは異邦人の捕囚となり、宗教的な誇りさえ奪われるのである。しかし平和な時代に食料飢饉と捕囚のことを考えるのは難しい。エゼキエルがこの預言をした頃はエルサレムは平和で比較的豊かであった。人々はそんなことになるとは思わなかった。そのうえエルサレムには、神の都エルサレムは不滅だと言うものがあつた。だからバビロンに一度侵略され、住民の一部が捕囚になつても「彼らは運が悪かつたのだ。しかしこの町もわれわれも安全だ」と言つて安心していたのである。しかしいくら「神の都」でも、偶

像礼拝と不道德とによつて神を忘れた町には不滅の保証はないのである。私たちも新約の預言によつて、終わりの日が近づいていること、その日は今だかつてなかつたような恐怖と破壊と審判の日であることを知らされている。しかしどれだけその日のために備えているだろうか。この世の平和ムードに乗つて安心し、のんびりしてはいないだろうか。当時のエルサレムの住民のように靈的に鈍い者にならないように気をつけよう。(鷹取著「エゼキエル」参考)

団塊セミナー

自死からの救い

6月27日(金)午後5~7時

大日丘住宅集会所
長田区大日丘町一丁目

英語で講義指導 大嶋善直氏
イエス・キリスト聖成伝道教会
お話 山本穂牧師

連絡先イエス・キリスト聖成伝道教会
長田区長田町1-2-6
Tel 691-1419